



登樂遊原

向晚意不適

驅車登古原

夕陽無限好

只是近黃昏

李商隱詩句

松風刻



登樂遊原

向晚意不適

驅車登古原

夕陽無限好

只是近黃昏

樂遊原(唐詩選五絶)に登る

晚ふに向むかへんとて意こころ適あはらず

車かを驅かへて古原こげんに登る

夕陽せきやう無限むげんに好このし

只是ただは近きう黄わう昏こんに近きし

李商隱詩ハニクハ五八は晚唐の詩人

此の詩の解釈

詩の語句通りを解釈すると、

夕暮れ^のせまるころ、何かなし心は荷たされな、車を走らせ、町を

出てずっと古、原に登る。(樂遊原は長安の都、西南にある小高い原)

原から見る夕日は、この上もなく見事だ。古くからの行楽地だがしかし、もはや

黄昏は近く、この夕日も消えてしまふのだ、

(唐の衰亡を感じ、詩ったとの事がある)

私はここに魅せられた

後半の大きく真赤な夕日が、真正面にとらえられる。それはユラユラと、

何物をも吸いこむかのように刻一刻沈んでゆく。何という美しい光景

だろうか。できればいつまでもこの光景の中にいたい。だが、

この光景は、やがてたそかれの闇の中に消えてゆく。その危うい
フランスの一時、そこに何とも名状し難い深い感動がある。

李商隱の場合、唐王朝が興つたすでに二百余年、その

勢いはようやく衰えを見せていた。都が一望のよとに見える
この古原に立ち、たそかれに近く限りなく美しく、落日の中に
滅びゆく唐の運命を感じたのであろう。

私は、この詩と今の自分の心境とを重ねることか多い。私の
住む沼南の町の一角に夕日の美しく、地点があり、愛犬と
よき歩を止め、大きな大きな真赤な落日を見た。その
犬も今はいない。滅びの美としかりと受けとめなければ
ならない。この上なく美しく輝いている落日の次に

来るもの——

誰もか歩み、そして見る夕日

なんだ。それは、悲しいもので、寂しいものでないのだ。

私は、完結かと考える。だから一番大事にしたいと強く

思う。
その期を

夕陽無限好がすぎた。この詩がすぎにから

刻し、表現してみた。

生き人みな滅びの美学を感じる時が来ることであらう。

石坂節子

(松風)